

# 青年期における絶望感と死に対する態度の関係について

The Relation between Hopelessness and Attitudes to Death in Adolescence

新美秀和・萩本竜也\*

Niimi Hidekazu, Hagimoto Tatsuya

## 要 約

青年期はイニシエーションによって例えられるほど死が身近となる時期である。また、この時期は絶望感が身近な感情となる時期でもある。しかし、死という究極的な自己否定を受け入れられた青年は絶望に陥りにくいのではないだろうか。そこで本研究では大学生を対象に、絶望感尺度と死に対する尺度を用いて調査した。その結果、死に対する態度尺度からは「死に対する恐怖感」「死の肯定的評価」「生の否定的評価」「死への無関心」の4因子が抽出された。またこれらを独立変数とする重回帰分析の結果、死を積極的に受け入れるほど絶望感は低くなるが、生死のうち生に焦点を当てて否定する態度に留まるほど絶望感はむしろ高くなることが明らかとなった。

**Key Words** : 青年期, 絶望感, 死に対する態度

## 目 的

### 1. 青年期における「死」

青年期とは児童期と成人期のあいだの移行の時期であり、身体的にも精神的にも大きな変化と成長を遂げる。それに伴い、自己の再体制化が大きな課題となってくる。Erikson (1959) の発達図式ではこの時期における危機テーマは「同一性の達成」vs「同一性の拡散」とされており、自らがどのような人間であるのかを構築していくなかで苦悩するとされている。河合 (1983) はこの時期の困難を深く理解するべく、「死と再生」のための儀礼であるイニシエーション (Eliade, 1958) の時期として青年期を捉えた。そして、社会制度としてのイニシエーションが喪失した現代においては、青年はそれぞれ個人的にこどもとしての「死」を内的に経験し、そこから大人としての再生に向かってもがき苦しむ必要があることを指摘した。

死の内的体験とは一見大袈裟な表現であるが、じつはそうでもない。少し古い調査だが、田中 (1998) は自殺死亡率に影響する加齢以外の要因を明らかにするべくコホート分析をおこなった。その結果、出生コホートによって自殺死亡率は異なる、つまり自殺率には社会経済的趨勢が影響することが明らかとなった一方で、どのコホートにおいても青年期 (田中の調査では15—24歳) の自殺率ももっとも高いことも明らかとなった。また、渋谷・渋谷 (1991) や與古田ら (1999)、角丸ら (2005) の調査によると、大学生のうち3割からなんと6割弱までもが自殺を考えたことがある。青年期後期は、たとえ順風満帆な日常生活を送っているようにみえても、死というテーマが非常に身近となる時期なのである。

\*聖泉大学人間学部卒業生 (2010年3月)

この時期において、死に対する態度の個人差は当然大きなものとなるであろうと予測できるが、では何が個人差を生み出すのであろうか。丹下（1995）は「死と生にまつわる価値や目的などに関する考え方で、感情や信念を含む」ものを死生観と定義し、15歳から30歳の被験者を対象に調査した結果、死生観と年齢との関連は見出せないと述べた。またその後の5年間にわたる調査（丹下、2004）で、身近な人との死別体験と死生観の変化の関係を調べたが、松田（1996）と同様に有意な影響は見出させなかったと述べている。つまり青年期における死に対する態度は、自分が置かれた状況や年齢などといった外的事情によって規定されるわけではない。あくまで内的必然性に従って、死についてこれまでより一步踏み込んで真剣にコミットしながら考え始める青年もいれば、目の前にちらつく死について考えることを完全に拒む青年も出てくるわけである。そして、その中で青年は死に対して何らかの態度を選び始めると考えられるのである。

では、死を前にどのような態度を取りうるだろうか。心理学において実証的にそれに取り組んだ研究の嚆矢は岡村（1983）であるが、そこでは死に対する態度のうち不安や恐怖などの否定的感情だけを取り上げられており、態度を広く研究しているとは言い難い。より包括的に死に対する態度を取り上げた実証的研究としては、丹下（1999）と河合ら（1996）を挙げることができるが、両者を比較すると河合らの研究のほうがより論理的にシンプルな因子構造を示している。それによると死に対する態度は、死や死に方についての恐れを意味する「死の恐怖」因子と、死の受け入れ方である「死の積極的受容」「死の回避的受容」「死の中立的受容」の3因子の、計4因子から構成されている。死をどれほど恐れているかとどのように受容しているかによって、死に対する個人差は表現できるわけである。

## 2. 絶望感と死に対する態度の関係について

ところで、Eriksonの理論のなかで青年期における中心的な危機は同一性に関わる危機とされているが、じつはこの同一性の危機に賦活されて、時間的展望が拡散する危機も同時に生じるとされている。これは時間が変化をもたらすと信じられないこと、また変化があるとしても基本的に良い変化ではないと信じることを指しているが、それが極端になった場合の臨床像として、生活が次第に緩慢となっていき、絶望感が現れてくると述べられている。それゆえ、青年期における危機を考える際、絶望感を問題とすることは重要であると考えられる（谷、1996）。同一性の危機が青年期において自然に生じてくる危機であるのと同様、絶望感もやはり青年期において自然に生起する感情ということができただろう。

ところで、ここまでみてきた通り、青年期は死に対する態度が形成され始める時期と考えられるのであるが、もし青年が死という究極的な自己否定の契機を積極的に受容できているなら、たとえ傍から見ればネガティブな未来像を抱かざるを得ない状況であったとしても、絶望の底に簡単には陥らずに済むのではないだろうか。そこで本研究では、死を受容できていれば絶望感は低くなるだろうという仮説を実証することを目的とする。

## 方 法

### 1. 調査対象

私立大学3校・専門学校1校にて配布し、207名の回答者を得た。うち16名に欠損値があり、有効被験者数は191名であった。

### 2. 質問紙の構成

質問紙はフェイスシート、「絶望感尺度」、「死に対する態度尺度」、自由記述の4パートから構成した。なお、今回の分析には自由記述の結果は用いなかった。以下に、心理測定尺度2つについて説明する。

**絶望感尺度** Beck, et al (1974) の開発した Hopelessness Scale を谷 (2002) が原文に忠実に翻訳した尺度で、20項目からなる。Beck らでは1因子構造とされたが、谷では「絶望感」「希望の欠如」「未来の不確実性」の3因子構造となった。「絶望感」は、絶望感に対して率直に質問している項目からなっている。「希望の欠如」はすべて逆転項目から構成され、未来へのポジティブな期待を測る項目から構成されている。「未来の不確実性」は、先に何が待っているのか予測不可能であることを示す項目からなっている。なお本研究においては、回答形式は Beck の原法に倣って「はい」「いいえ」の2件法で実施した。

**死に対する態度尺度** Gesser, et al (1987-1988) が作成した尺度を河合ら (1996) が邦訳したもの。全20項目からなる。前節で述べたとおり「死の恐怖」「死の積極的受容」「死の回避的受容」「死の中立的受容」の4因子が抽出されている。評定は5件法とした。

### 3. 手続き

すべて授業時間内に集団法で実施した。調査時期は2009年9月～11月であった。

## 結 果

### 1. 絶望感尺度の因子構造

まず、絶望感尺度の構造を把握するために因子分析（主成分法、Promax 回転）を行なった。因子数は、スクリープロットおよび解釈のしやすさから3因子に指定して実施した。結果は以下の表1の通りである。

なお、最大の因子負荷量が.4を下回る質問項目については削除した上で再度因子分析をおこなっている。削除されたのは「私が最もやりたい事を成し遂げるための時間は十分にある」、「私が本当に欲しいものは手に入れられないと思う」の2項目であった。

第1因子は「私の望むものは決して手に入れられないから、何かを望むことはばかげている」「望むものを手に入れようと思っても多分手に入れられないだろうから、何かを望むことはばかげている」など、先行きに対する暗い見通しを述べた項目に強く負荷したため、「未来についての否定的な見通し」因子と名付けた。第2因子は「物事がうまくいかなくても、それがいつまでも続

表1 絶望感尺度の因子分析結果

		因子負荷量			
		F1	F2	F3	
問1	16	私の望むものは決して手に入れられないから、何かを望むことはばかっている	.766	.070	-.207
問1	20	望むものを手に入れようと思っても多分手には入れられないだろうから、何かを望むことはばかっている	.681	.226	.017
問1	9	私はいまだにチャンスが得られていないし、これから先もチャンスを得られるとはとても思えない	.643	-.127	-.103
問1	17	将来私がこころから満足することはありそうにない	.613	-.000	.080
問1	7	私の未来は暗いように思われる。	.567	-.167	.097
問1	11	自分の将来を思うと、苦しいことばかりで楽しいことはなさそうだ。	.553	-.207	-.061
問1	14	何事にせよ私の望む通りにはならないだろう	.525	.099	.393
問1	2	私は物事を自分の思うとおりに出来ないので、あきらめたほうがしました	.490	-.041	-.134
問1	10	私の過去の体験は、私の未来のためになるものだった	-.442	.052	-.060
問1	3	物事がうまくいかなくても、それがいつまでも続くわけではないと思えば気が楽になる	.100	.783	.342
問1	19	将来、悪いことよりも善いことのほうがよくありそうだ	-.037	.677	-.078
問1	13	未来のことを考えると、今よりも幸せになっているだろうと思われる	-.091	.642	-.060
問1	6	私がとても心配していることは、将来うまく解決するだろうと思われる	-.064	.587	-.056
問1	8	普通の人よりもましな人生を送れると思う	.052	.578	-.122
問1	4	10年後に自分がどんな生活をしているか予測できない	-.083	.170	.823
問1	18	私にとって未来はあいまいで不確かなものである	-.053	.040	.751
問1	1	私は希望で胸をわくわくさせながら未来を待ち望んでいる	.067	.265	-.514
問1	15	私は未来を強く信じている。	.028	.394	-.508
寄与率 (%)		27.83	9.63	7.02	

くわけではないと思えば気が楽になる」「将来悪いことよりも善いことのほうがよくありそうだ」など、逆転項目のみに強く負荷していたため、「未来についての楽観的な見通し」因子と名付けた。第3因子は「10年後に自分がどんな生活をしているか、予測できない」「私にとって未来はあいまいで不確かなものである」などの質問項目に強く負荷していたため、「未来に対する不確定感」因子と名付けた。

次に、絶望感尺度の各下位尺度得点を算出した。算出方法は、因子ごとに、その因子がもっとも高く負荷している質問項目における得点を単純加算することとした。ただし、マイナスの負荷量の場合は得点を逆転して算出した。なお、各下位尺度における $\alpha$ 係数は「未来についての否定的な見通し」が.761、「未来についての楽観的な見通し」が.704、「未来に対する不確定感」が.666であった。

また、各下位尺度間の関連を調べるべく相関係数を算出した。結果は以下の表2のとおりであった。

表2 絶望感尺度の3下位尺度間の相関係数

	否定的見通し	楽観的見通し	不確定感
否定的見通し	—	-.528 (*)	0.361 (*)
楽観的見通し	—	—	-.432 (*)
不確定感	—	—	—

\* p &lt; .001

楽観の見通しのみ、得点が低いほど絶望感が強いとみなせる尺度である。つまり、3つの絶望感のあいだにはそれぞれ有意な正の相関がみられ、また相関係数そのものも中程度に高いことが明らかとなった。

## 2. 死に対する態度尺度の構造

次に、死に対する態度尺度の因子分析を実施した。因子数は、絶望感尺度と同様の理由から4因子に設定した。最大の因子負荷量が.4を下回る質問項目については削除した上で再度因子分析をおこなった結果、「私にとって、死の最終的な事実に臆せずに立ちむかうことは難しいと思う」「私達すべては死ななければならないという事実をしかたがないとあきらめている」「私はゆっくりと死んでいくのがこわい」の3項目が削除されることとなった。残りの17項目の因子負荷量については、以下の表3の通りである。

表3 死に対する態度尺度の因子分析結果

			因子負荷量			
			F1	F2	F3	F4
問2	6	人生は短いと思うと心が揺らぐ	.828	-.041	-.052	.200
問2	4	時ならぬときに死んでいくのではないかと心配だ	.801	.006	-.014	-.048
問2	7	自分自身の死を予想すると不安になる	.730	-.097	.015	-.241
問2	11	暴力によって死んでいくことが心配だ	.721	.038	.051	.199
問2	3	死は永遠の幸福な場所への道だと思う	-.029	.771	.058	-.100
問2	10	痛みは恐ろしいが、死は痛みからの救済だから死は恐れることはない	-.069	.748	-.066	.274
問2	20	死は私の真正な重荷からの救済だと思う	.008	.634	.279	-.021
問2	9	私は死後の世界を楽しみにしている	-.071	.605	-.093	.145
問2	19	私が死んだら天国に行くと思う	.192	.576	-.293	-.115
問2	1	天国はこの世よりもよいところだと思う	-.025	.576	.169	-.220
問2	16	私の人生を延ばすことにどんな意味も目的も見つからない	.035	-.065	.820	-.056
問2	17	この世に期待するものは何もないと思う	.164	.031	.769	.110
問2	5	私は生きることにうんざりしている	-.169	.076	.762	-.002
問2	13	私は死を恐れないし、歓迎もしない	.103	.026	-.093	.754
問2	18	死は私にとってどうでもよいことだ	-.098	-.112	.273	.639
問2	12	死は単に生命の過程の一部である	.262	.096	.081	.597
問2	2	苦しんで死ぬのが怖い	.292	.019	.168	-.530
寄与率 (%)			21.66	15.63	10.30	7.55

因子1は死や死に方に対する恐怖感情が語られる項目に強く負荷しており、「死に対する恐怖感」因子と名付けた。因子2は死を救済や幸福などと関連づけた項目に負荷していたため「死の肯定的評価」因子、因子3は生きることや現世の無意味さを述べる項目からなっていたため「生への否定的評価」因子、因子4は死への感情が乖離された記述の項目に負荷していたため「死への無関心」と名付けた。

次に、死に対する態度尺度の各下位尺度得点を算出した。算出方法は、因子ごとに、その因子がもっとも高く負荷している質問項目における得点を単純加算することとした。ただし、マイナスの負荷量の場合は逆転項目とみなして算出した。なお、各下位尺度における $\alpha$ 係数は「死に対する恐怖感」尺度が.765、「死の肯定的評価」尺度が.711、「生の否定的評価」尺度が.736、「死への無関心」尺度が.553であった。

### 3. 「絶望感」と「死に対する態度」の関係モデルについての探索

上記下位尺度得点をもとに絶望感と死に対する態度の関係モデルを探索した。基本的な枠組みとして「死に対する態度」を説明変数にして「絶望感」を目的変数とすることとした。まずは全体像を捉えるべく、絶望感尺度の各下位尺度の尺度得点を従属変数とし、死に対する態度尺度における4下位尺度得点を独立変数として重回帰分析を行なった。結果は表4の通りである。

表4 重回帰分析結果（独立変数：死に対する態度下位尺度，従属変数：絶望感下位尺度）

	未来に対する 否定的見通し		未来に対する 楽観的見通し		未来への 不確定感	
	標準化係数	p	標準化係数	p	標準化係数	p
死に対する恐怖感	.060	.400	.078	.281	-.075	.327
死の肯定的評価	-.140	.051	.336	.000	-.254	.001
生への否定的評価	.486	.000	-.406	.000	.309	.000
死への無関心	-.035	.629	.055	.457	-.112	.150
R <sup>2</sup>	.233 (p<.05)		.209 (p<.05)		.119 (p<.05)	

表4より、絶望感に有意な影響を与えたのは「死の肯定的評価」「生への否定的評価」の2因子だけであることが分かる。

また、「未来に対する否定的見通し」と「未来への不確定感」に対しては「死の肯定的評価」が負の影響を与えており、「生への否定的評価」が正の影響を与えていることが分かる。一方、「未来に対する楽観的見通し」に関しては逆の影響を与えていることが分かる。ただし、「楽観的見通し」は元来、逆転項目として作成された項目のみから成っている下位尺度であり、この尺度のみ得点が低いほど絶望感が高いことを意味する。つまり、死に対する態度の下位尺度という観点から見ると、絶望感の3下位尺度間の違いはほぼ見出せなかったとよい結果であった。

次に、死に対する尺度の下位尺度間の関連を調べるため、各下位尺度間の偏相関を求めた。ここで通常の相関係数ではなく偏相関係数を採用した理由は、他の変数を経由した関係性を除去し、変数間の関係を純粹に抽出したかったからである。制御変数としては、相関性を確認しようとしている2尺度以外の尺度すべてを指定した。例えば「死に対する恐怖感」と「死の肯定的評価」の偏相関係数を算出する場合、制御変数としては「生への否定的評価」「死への無関心」とした。結果は以下の通りであった。

表5に見られるとおり、全体的に相関はそれほど高くなかったが、いくつか有意な相関係数がみられた。まず「死に対する恐怖感」は「死への無関心」と負の相関がみられた。「死への無関心

表5 死に対する態度尺度下位尺度間の偏相関

	死に対する恐怖感	死の肯定的評価	生への否定的評価	死への無関心
死に対する恐怖感	—	.112	.139	-0.320 <sup>(*)</sup>
死の肯定的評価		—	0.225 <sup>(*)</sup>	-0.284 <sup>(*)</sup>
生への否定的評価			—	.091
死への無関心				—

\* : p < .05

心」はそのほか「死の肯定的態度」と負の相関がみられた。「死の肯定的態度」は、そのほかでは「生への否定的評価」と正の相関がみられた。以上の結果を構造的に把握するなら、4種の「死に対する態度」は互いに複雑に関連しあっているというよりも、一直線上に並んで隣り合う態度間でのみ相関が見られるというモデルをイメージしたほうがよいことが分かる。このモデルに、先述の表4の重回帰分析の結果を組み合わせると、次のようなモデル図を描くことができるだろう（図1）。

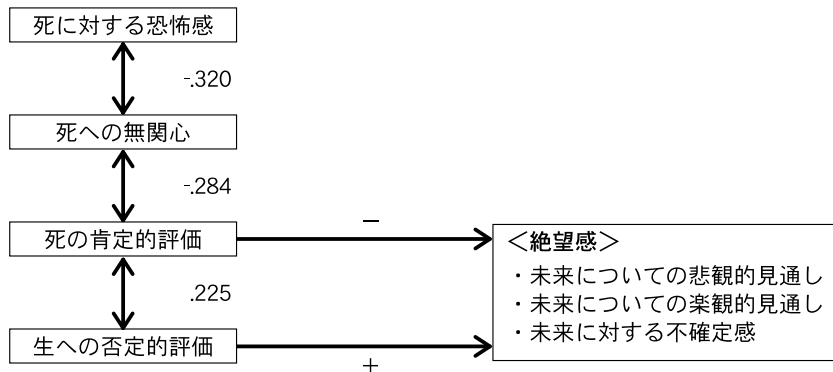


図1 死に対する態度が絶望感に与える影響モデル

## 考 察

### 1. 絶望感について

谷（2002）の研究では絶望感尺度は3因子とされたが、本研究でも3因子とみなせる結果となり、また項目のまとまり方もほぼ同様のものとなった。

この結果で注目したいのは、谷と同様に、逆転項目として設定された質問項目が一つにまとまったという点である。このことは、「未来についての否定的見通し」とその反対の「未来に対する楽観的見通し」が、論理的には逆のものであるにもかかわらず、心理的には逆の意味とはならないことを示唆している。すなわち、未来を明るくイメージすることができないことは、必ずしも暗くイメージすることにはつながらないということである。別の言い方をすると、心理学的に言うなら希望は絶望の反意語ではないということになるだろう。なぜだろうか。

あまり注目されないことであるが、Erikson（1982）は自らのエピジェネシス図式のなかで希望 hope と絶望 despair を非対称的に扱っている。この図式においては、希望とは乳児期における「基本的信頼」と「基本的不信」のせめぎあいの中で、前者が比較的優勢な場合に獲得される基本的な強さとしている。一方、同図式では絶望とは老年期における crisis において「統合」とせめぎあう要素としており、そのもっとも単純な意味は「身体・精神・社会的エートスにおける連鎖の喪失」であるとしている。つまり、希望とはある危機的な状況において作動しうる心的能力であり、絶望とは危機状況そのものを指していることになるのである。谷（2002）や今回の研究において逆転項目が1因子下にまとまったのは、「未来に対する楽観的な見通し」尺度で

は Erikson のいう「希望」を持つ力の強さを測定している一方で、「未来に対する否定的見通し」は自らが置かれている現状に対する否定的認知の程度を測定している、つまり一見反対のものを測定しているようでレベルの異なるものを測定していたからだと解釈することができるだろう。

## 2. 死に対する態度について

本研究では、死に対する態度として「死に対する恐怖感」「死の肯定的評価」「生への否定的評価」「死への無関心」という4つが抽出された。これらは相互に関連していることが予想される態度である。そこで、純粋に4態度間の関係をみるべく偏相関係数を算出したが、結果は表5・図1に示したようなシンプルなものとなった。

ここで、これら4つの態度を理解する上で一つの補助線を引いてみたい。すなわち、「死に対する恐怖感」「死への無関心」「死の肯定的評価」を1組の連続する態度とみなし、「死の肯定的評価」「生への否定的評価」を連続する態度とみなしてみるのである。

まず、「死に対する恐怖感」「死への無関心」「死の肯定的評価」の組について取り上げる。図1からは、この3態度は「死への無関心」を中心としていることが分かる。すなわち、「死への無関心」が高くなるほど、「死に対する恐怖」と「死の肯定的評価」は低くなるのである。「死への無関心」は死という究極の事態に対して関心をよせない態度を示している。一方で、「死に対する恐怖感」では死を恐れ、「死の肯定的評価」では死を待ち望んでいる。評価内容こそ正反対であるけれども、死への関心という次元でいえば両者ともに強いと考えられるわけである。以上をレヴィ＝ストロースに倣って構造化すると下のように図示できるだろう（図2）。

次に、「死の肯定的評価」「生への否定的評価」の組について考えたい。両者は有意な正の相関が得られた ( $r = .225$ )。死を救済として待ち望む態度と現世にうんざりする態度は互いに裏打ちしあうと考えるのは自然な解釈であろうから、理解しやすい結果であったといえるだろう。ただし、相関係数としてはそれほど高い値とはいえない。おそらくいくつもの心理変数が影響してきた結果、相関性が抑制されたのであらうと思われる。

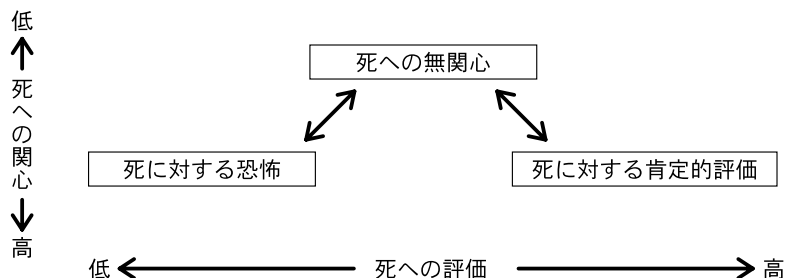


図2 死に対する態度の構造モデル



### 3 死に対する態度と絶望感の関係について

最後に絶望感と死に対する態度の関連について考えたい。なお、結果ですでに述べたように、死に対する態度を切り口とする限り絶望感の3下位尺度のあいだに差異が見出せなかったため、以降の考察では絶望感を1概念として検討することとする。

まず、重回帰分析の結果にみられるとおり、死を待ち望んでいるほど絶望感は低くなり、生きる意味や現世の価値を見失ってしまっているほど絶望感を強く感じるという結果が得られた。これはユニークな結果であるといえるのではないだろうか。「死の肯定的評価」と「生への否定的評価」は、死を肯定的にとらえて生を否定的に捉えている態度という点では対になっていると思われるからである。しかし前項にみたとおり、相関係数は有意ではあれそれほど高くはなく、また重回帰分析の結果では影響の方向は逆となった。なぜだろうか。

死はいわば究極の自己否定である。これを解放や救済として待ち望むなら、自らの将来における予期がたとえ通常否定的とされるのであったとしてもデプレッシブにならず、むしろその中にある肯定的要素に目を向ける余裕があるだろう。つまり、簡単には絶望しなくなるということである。一方、生や現世に倦み飽きているなら、将来についての予期イメージのうち否定的側面に着目しがちとなる、つまりすぐに絶望することになるということであろう。

本研究は、死を受容しているほどに絶望感は低くなるだろうという仮説を立てていた。しかし、一口に死の受容といってもさまざまな受容の仕方がある。今回の調査結果は、生と死のうち死に焦点を当て、それを積極的に待ち望むような受容の仕方をするならば絶望感に陥りにくくなる一方で、生死のうち生に焦点を当てそれを否定するというかたちで死に向かい合うなら、つまり死そのものに直接向かい合おうとせずにいるならば、むしろ絶望感に陥りやすくなるということが明らかになったといえる。この点で、仮説は部分的にしか支持されなかったといえるであろう。

#### 今後の課題

今回の研究では、「死への無関心」は絶望感に影響を及ぼさないという結果となった。しかし、「死への無関心」は、深層心理学的に考えるなら死の恐怖からの乖離として理解することも可能であるし、死が身近なテーマとなる青年期ではむしろそう考えるほうが自然であろう。このあたりも含めて理解を深めていこうとするなら、投射法を用いることが考えられるだろう。

また、因子分析の結果からは、3種の絶望感を抽出できたにも関わらず、死に対する態度という切り口からは3つの差異が消えてしまう結果となった。何らかの変数を媒介させるとより精緻に両者の関係をモデル化することができるであろうが、それも今後残された課題である。

#### 引用文献

- Beck, A. T., Weismann, A., Lester, D. & Trexler, L. (1974) : The measurement of pessimism: The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 20, 200-207.
- Eliade, M. (1958) : Birth and rebirth. Harper and Brothers Publishers. : 堀一郎訳 (1971) : 生

と再生. 東京大学出版会.

Erikson, E. H. (1959): Identity and the life cycle. *Psychological issues*, 1, 1-117. : 小此木啓吾訳  
(1982): 自我同一性——アイデンティティとライフサイクル. 誠信書房.

Erikson, E. H. (1982): *The life cycle completed: a review*. W. W. Norton & Company. : 村瀬孝雄・  
近藤邦夫訳 (1989): ライフサイクル, その完結. みすず書房.

Gesser, G., Wong, P. T., & Reker, G. T. (1987-1988): Death attitudes across the life-span: The  
development and validation of the Death Attitude Profile (DAP) . *Journal of Death and Dying*,  
18, 113-128.

角丸歩・山本太郎・井上健 (2005): 大学生の自殺・自傷行為に対する意識. *臨床教育心理学研  
究* (関西学院大学), 31 (1). 1-8.

神田橋條治・岩永竜一郎・愛甲修子・藤家寛子 (2010): 発達障害は治りますか?. 花風社.

河合隼雄 (1983): 大人になることのむずかしさ——青年期の問題. 岩波書店.

河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996): 老年期における死に対する態度. *老年社会科学*,  
17, 107-116.

松田伸樹 (1996): 青年の死の不安を規定する要因についての検討——性差, 死別体験, 時間的  
展望の観点から. *人間科学研究* (神戸大学発達科学部人間科学研究センター), 4, 57-65.

岡村達也 (1983): 「死に対する態度」の研究——青年と成人との比較. *東京大学教育学部紀要*,  
23, 331-343.

渋谷園枝・渋谷昌三 (1991): 「生」と「死」のイメージ調査の基礎的分析. *山梨医科大学紀要*,  
8. 41-52.

田中伸和 (1998): 自殺率と加齢の関係性——加齢の効果を装飾する社会経済的要因. *杏林医学*,  
29 (3). 307-322.

丹下智香子 (1995): 死生観の展開. *名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科*, 42, 149-156.

丹下智香子 (1999): 資料 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の  
検討. *心理学研究*, 70 (4), 327-332.

丹下智香子 (2004): 青年前期・中期における死に対する態度の変化. *発達心理学研究*, 15 (1),  
65-76.

谷冬彦 (2002): 絶望感尺度の構造に関する研究. *神戸大学発達科学部研究紀要*, 9 (2).  
17-27.

與古田孝夫・石津宏・秋坂真史・名嘉幸一・高倉実・宇座美代子・長濱直樹・勝綾子 (1999):  
大学生の自殺に関する意識と死生観との関連についての検討. *民族衛生*, 65 (2). 81-91.